

竹長吉正先生に感謝

白鷗大学教育学部教授

益 田 勇 一

「チャイコフスキー：ピアノ協奏曲 第1番 変ロ短調」。クラシック音楽を愛聴されるという竹長先生が、好んで聴かれる曲として最初にあげられた作品である。かつて、つかこうへいが『熱海殺人事件』の冒頭で使い、強烈な印象を与えた曲でもあるが、まさにドラマチックな出だして聴く人の心をわしづかみにする名曲といえる。もう一人、好きな作曲家としてあげられたのがショパンであった。チャイコフスキーにショパンと並べられると、休日のひと時を音楽とともに過ごす、いかにもオーソドックスなクラシック愛好家を連想するかもしれないが、先生の聴き方はかなり本格的である。1968年、アンセルメ率いるスイス・ロマンダ管弦楽団が初来日し、上野の東京文化会館で演奏会を開いた。聴衆の一人であった先生が、その時の印象を書いたものが『音楽の友』誌に掲載されたとのことだ。「アンセルメの演奏は論理的で、正確なんだよ。彼は数学をやっていたからね」と――これは先日、先生から直接お聞きしたことであるが――さらりとスイス・ロマンダの演奏を評した。ショパンに関心をもたれたきっかけは、浦和出身の詩人である霜田史光（1896-1933）について調べているときに、史光が作品のなかでショパンにたびたび言及していたからだという。先生は無名といってもいい史光の詩に興味をもち、遺族に取材したりしながら文献を発掘し、研究をまとめた成果を出版した。これまでの研究を振り返って見たとき、文学研究としては最も印象に残るものだそうである。Wikipediaの霜田史光のページには先生が出版された研究書が載っている。

私たちが知っている竹長先生は国語教育の専門家であるが、高校に入っただけの竹長青年は物理学や天文学に興味をもち、理科系の大学を目指

していた。自宅から高校までの距離が遠かったことから、実家を出て学校の近くで一人暮らしを始めたのが転機だったそうだ。成績優秀な理系志望だった竹長青年は、悪い仲間にさそわれ文芸部に入部する。「あれが転落の始まりだった」と、先生は当時を振り返る。しかし、そのときに書いた小説が、福井新聞社主催——先生は福井出身である——のコンクールで1位に選ばれ、新聞にも掲載された。デビュー作がいきなり文学賞みたいな感じであったろう。文系に転向した竹長青年は、東大在学中に書いた作品で芥川賞を受賞した大江健三郎の影響もあり、「仏文」を目指すことになるが、受験はうまくいかず、東京学芸大学に入学する。高校文芸部で竹長青年の小説を見出し、コンクールに出品することを薦めてくれた顧問の先生の出身大学であったことが、学芸大を選んだ理由だそうだ。

学芸大はおもしろかったそうで、武蔵小金井の「ドナウ」や吉祥寺の「古城」といった名曲喫茶でアルバイトをしつつ、高校教師を目指すことになった先生は、学部卒業後14年間、高校で国語科教員を務めることになる。卒論は夏目漱石の研究で、卒業後は教員をしながら好きな文学研究を継続するつもりであったが、埼玉の高校から学芸大附属高校の大泉校舎に転任することになったことで、またまた転機を迎える。大泉校舎は5年前に閉校となったが、帰国子女ばかりを集めた特殊な高校であった。先生はそこで、外国語はできても日本語はいま一步の生徒を相手に日本語教育を担当し、国語教育のおもしろさと重要性に目覚め、学芸大の大学院に進むことになる。そこで本格的に国語教育を学びなおした先生は、大学院修了後は埼玉大学教育学部で国語教育の専門家の道を歩み始めた。

「学生のレポートを見ていると、自分が気づかなかったことを書いてくる学生がいるんだよね。学生から学ぶことも多かったなあ」と、竹長先生は大学での教員生活を振り返る。「知識の切り売りだけではおもしろくないんだよ。学生から学ぶことがあったから教師をやってこられた」ともおっしゃった。若い頃の話を一通通聞きしたあと、教職を目指す学生にメッセージがあれば、とお決まりの質問を向けてみたところ、先生は自ら考える

教師像について語り始めたのだ。よい教師になるよりも、人間としての完成を目指してほしい。人に教えるには自ら学ぶ、自らを律することが大事。子どもにどう教えるかよりも、子どもから学ぶこと、自分も子どもになってみて、子どもの目線から考える、子どもを観察すること。子どもを見る目を充実させるには知識も必要。教師には生涯にわたって学び続ける姿勢が必要、子どもから学ぶという謙虚さを失わないこと、というようなことを一気に語られた。先生が最終講義で配布された資料には、国語科教師として考えるべきことが5項目にまとめられているが、その最後には「それ[国語教育]は学習者一人一人の「しあわせ」を願って、その「しあわせ」をつくりだすための「言葉の力」をつけてあげたいということである」と書かれている。退職後も先生は子どもたちの作文指導や読書指導に関わりたいとのことだ。先生にとって「指導」は、仕事ではなく、自ら学ぶことであるから続けられるのであろう。

若い頃はチャイコフスキー、ショパン、ベートーヴェンらが書いた情熱的な、あるいは「情景が思い浮かぶような曲」（竹長先生談）を愛聴した先生だが、近年はバッハを聴くようになったとのこと。「バッハの曲ってみんな同じに聴こえるんですね」と軽口をたたく筆者を否定することはなかったが、「何も分かっておらん」と視線が語っていた。DNAの塩基配列とバッハの曲の構造に共通性があるという話を聞いたことがあるが、やはり、バッハを聴くと眠っていた理系の感性が刺激されるのであろうか。

ほんの30分ほど、お話を伺おうかと思っていたのだが、気がつくとなんりの時間が過ぎていた。片付けが進み、空隙が目立つようになった書架に寂しさを覚えながら先生の研究室を出ると、辺りはすっかり暗くなっていた。貴重な時間を、ありがとうございました。